

岡崎ルツ子作 「心いやされてこそ」

< 前編 >

仙台、広瀬川岸

一夫 おい、弘、こっちの方が花火、よく見えるよ。上がってこいよ。
弘 うん、待ってよ、一夫君。
弘 ほんとだ。きれいだね。
弘 うわあ、すごーい。今の大きかったね。一夫君。
一夫 うん。
一夫 おい、弘。約束覚えてるか？
弘 うん、覚えてる。僕と一夫君、2人でお医者さんになるって。
一夫 約束だぞ。(2人で)指切りげんまん、ウソついたら針千本飲一増す、指切ったあ。

医務室

花火の音。電話の音、だんだんはっきりと -

明石 はい、明石です。...あ、丹野君か。4時から教授会？忘れてたよ、今行く。

ナレーション 電話で起こされるまで、わたしは懐かしい夢を見ていた。小学校の時から親友、山本弘と広瀬川の花火大会に行った時の思い出。確かあの夏休み、山本は盛岡へ転校して行ったんだって...。わたしは明石一夫。都内の大学病院の外科の教授をしている。外来診察、手術、学会出席、論文作成、教授会、そのほかあらゆる雑事も含めて多忙な毎日を送っている。今も、昨夜の徹夜のオベのあと外来を早めに切り上げて、昼の2時間ほど医務室で仮眠を取っていたところだった。

明石 それで、白血球は？
丹野 はい、1万超えてます、炎症反応もあります...
明石 それで？
丹野 はい、あの...
明石 君の診断を聞いているんだよ。
丹野 は、はい、典型的な虫垂炎かと...。
明石 いいだろう。
丹野 はい？

明石 その診断でいいだろうと言ってるんだ。
丹野 は、はい。
明石 手術の用意はできてるのかね？
丹野 はい、4時から開始できるようにしてあります。
明石 わたしが出るまでもないな。君と助教授の高橋君とでやってくれ。
丹野 はい。
明石 麻酔科に連絡するのを忘れないようにな。
丹野 はい、わかりました。
明石 丹野君。
丹野 はい？
明石 君は出身はどこだね？
丹野 は...？ 岩手ですが。
明石 そうか、やっぱりな。
丹野 分かるんですか。
明石 ああ。同じ東北出身には、懐かしいなまりだよ。...盛岡に(病院の自動ドアが開く音)、わたしの親友がいる。
丹野 盛岡に？
明石 うん、実にいいやつだ。医者をやってる。
丹野 はい。
明石 昨日、やつの夢を見てね。おかしなものだな。
丹野 何が、ですか？
明石 もう、40年もたってるのに、夢の中では故郷の山も川も変わってないんだ。...やつとも随分会ってないなあ。

車に乗り込むー

明石 じゃ、あとはよろしく。
丹野 はい、お気をつけて。(ボタン、ドア閉まる、高級車の走り去る音。)

ナレーション 親友の山本弘は父親が結核で亡くなったため、小学4年の夏、彼の母方の実家のある盛岡に引っ越していった。それまで学校の行き帰りも、遊ぶのも、いたずらするのも彼と一緒にだったわたしは、随分と寂しい思いをしたことを覚えている。医者になりたいと最初に言い出したのは、どっちだったろう。子供のくせにわたしたちは、人はどうしたら幸せになれるのか、何てことをまじめに話し合ったものだった。

回想

一夫 やっぱりお金持ちのほうがいいに決まってるよ。
弘 武田くんちみたいに？
一夫 うん。何でも買ってもらえるしさ。あいつのうち、倉が2つもあるんだぜえ。

弘 武田くんちのおばちゃん、いつもきれいな着物着てるよね。
一夫 あーあ、お金持ちになりたいなあ。
弘 でもさ、僕、やっぱり…。
一夫 やっぱり、何だよ。
弘 体が丈夫な方がいいかなって思うな。お父さん、いつも病気でかわいそうだもん。
一夫 うん、元気な方がいいな。丈夫な方がいいよ。いいに決まってる。
弘 体が丈夫だったら、幸せになれる？
一夫 なるさ。貧乏だったらお金もうけりゃいいんだから。
弘 そっか、あとでお金持ちになって幸せになれるね。

ナレーション 人々が健康で幸せになれる手助けをする職業、そう、医者になろうと2人で誓ったあの遠い日から、40年たった。2人で仙台の大学で学び、今ではわたしは東京の大学病院に、山本は地方の総合病院の勤務医になっていた。山本にも大学でポストに就くチャンスがあったのだが、彼は第2の故郷に戻る道を選んだのだった。優秀な男だったが、大学時代クリスチャンになった彼は、中央での名声も高給も求めなかった。まあ、そんなところが彼らしいとも言えるのだが…。

ナースステーション

看護婦 明石先生、先月退院した加藤さん、覚えてますか？
明石 ああ、あのアルコール中毒の？
看護婦 ええ、せっかく手術が成功したのに、無断外泊ですよ。おまけに大酒飲んで。
明石 ああ、あのね。覚えてるよ。その人がどうした？
看護婦 先週、酔っ払って、車道に飛び出して跳ねられて。
明石 跳ねられたぁ？
看護婦 重傷で、太田区の病院に入院してるんだそうです。
明石 何てこった…。

ナレーション まったくやりきれない。こんなとき、本当につくづく医者無力さを感じる。精一杯治療して病気を治したとしても、その人の一生までは保証できない。幸せになどできはしない。大体、人間の本当の幸せって何なんだ？ あの幼き日、健康であれば人間は幸せになれるんだと単純に思っていた。だが、本当にそうだろうか？ 体がびんびんしていても不幸な人はごまんというし、逆に病の床にあっても充実した人生を送っている人もいる。早い話、わたしだってやみくもに働いて、それなりの地位を得て、それで幸福なのか？ では、心の奥底を吹き抜けるこのむなしさは一体何なのだ？ そんなことをしきりと考え始めたこのごろ、わたしは親友の山本に会

いたかった。会って、クリスチャンとしての彼の生き方を聞いてみたかった。

医師室

秘書 先生、遠方からお客様がいらしてます。お通ししてよろしいでしょうか？
明石 客？ 予約はないぞ。外来が終わってこれから巡回なんだが。ま、仕方ない、お通しして…。

後から

山本 忙しいところ、邪魔してすまないねえ。
明石 山本！

ナレーション 驚いた。会いたいと思っていた当の本人が目の前にいるのだ。幾分やつれて、しかし、少年時代の面影のある人懐こいほほえみを浮かべて、彼は立っていた。

明石 一体どうしたんだ!? こっちで学会でもあるのか？
山本 いや、君に相談があってね。連絡もしないで、すまん。でも相変わらず元気そうだな。よかった。
明石 いやあ、昨日子供のころの夢を見て、お前に会いたいと思ってたところなんだよ。驚いたな。知らせてくれたら、寿司でもとったのに…。ま、入れよ。
山本 悪いね。
山本 やっぱ東京は暑いね。
明石 風がないのがつらいだろ。エアコンつけるかい？
山本 いや、結構だ。体が冷えてね。
明石 おれもだよ。どうも最近はずぐ体がへたばる。年だね。
山本 50だものな、お互い。

ナレーション 寂しそうな山本の声に、一瞬おやと思った。

明石 で、何だ、相談って？
山本 ああ。患者のフィルムを診てもらおうと思って。幸い、親友の君は著名な外科医だ。その君の診断を仰ぎたくてね。

ナレーション そう言うと山本は、持参の袋からレントゲンや胃カメラのフィルムを取り出した。

山本 …どうだろう。胃ガンと見てるんだが。
明石 うん、そうだな。胃ガンが大分進行してる。ああ、これは大腸にも転移してるな…。

山本 手術は可能か？
明石 やってできないことはないが、大手術になるぞ。しかし、そっちの病院にも外科医はいるだろう。相談してみたら？
山本 いや、明石、君に執刀してもらいたいんだよ。
明石 また何で？ この患者、君の知り合いか？
山本 どうしても君に... やってもらいたいんだ。

ナレーション 山本の真剣な白い顔を見てわたしははっとした。この胃ガンの患者は、山本自身だったのだ...。わたしの頭の中を、なぜか一瞬、夢に見た幼いころの情景がよぎった。

回想

弘 体が丈夫だったら、幸せになれる？
一夫 なるさ。貧乏だったら、お金もうけりゃいいんだから。
弘 そっか、あとでお金持ちになって、幸せになれるね。

ナレーション わたしは凍りついたように、山本のフィルムを見つめていた。

<後編>

隅田川、屋形船

ナレーション 山本の手術は8月中旬に決まった。彼は奥さん呼び寄せ、手術までの期間を都内のホテルで過ごすことになった。わたしと妻の早苗は、山本夫婦を誘って、隅田川の花火を見に行くことにした。

山本 豪勢だなあ。屋形船なんて初めてだ。殿様の気分だね。君は奥方か。
山本の妻 まあ、あなたったら。
皆 (笑う)
明石の妻 どんどん召し上がって。お寿司も天ぷらも、お好きなだけどうぞ。
明石 そうだよ、遠慮するなよ。どんどんやってくれよ。
山本 食べてるよ。まったくおいしいね。本場の江戸前だね。
明石 おい、広瀬川の花火大会よく行ったなあ。
山本 ああ、握り飯持って行ったけな。あれは楽しかったね。
明石 あの時人を幸せにする医者になろうと約束したの、覚えてるか？
山本 もちろん。幼いながらも僕はね、人は健康であれば幸せになれると本気で思った

よ。丈夫で長生きできたら、どんなにすばらしいだろうってね。

明石

…。

山本

だから大学時代、聖書を読み始めてイエス・キリストを知った時、物足りなさを感じたんだ。

明石

何が物足りなかったんだ？

山本

キリストが奇跡を行う力を持っていながら、何で世界中の人々の病をいやしてあげなかったんだとね、不満だった。

明石

なるほど。

山本

すべての人が健康で、心配事がなく豊かに暮らす、それが理想だと思っていたんだが…。

明石

現実にはそうじゃない。

山本

そう、自殺するかもしれない、何が起こるか全く分からない。健康も財産も危ういものだ。…本当の幸せとは、もっと違うものなんじゃないかと思えてね。悩んだよ。むさぼるように聖書を読んだ。

明石

うん。

山本

例えば、キリストが、当時のユダヤでさげすまれていた取税人や罪人たちと、食事をしたという箇所がある。それを見たユダヤの指導者たちが、キリストを非難して言うんだ。「なぜ、あの人は罪人たちと一緒にいるのか」って。キリストはそれに答えてこう言った。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです」。自分が病気だったら医者に行けばいい。でも、人の心には、人を幸せから遠ざける罪がある。神を捨て、自分中心に生きていこうとする罪がね。そんな人の心をいやしてくれるのが、キリストなんだって、…僕は…その時…うう…。(急におなかを抱えて苦しみ出す)

山本の妻

あなた、どうしたの!?

ナレーション 悲鳴のような奥さんの声にはっとした。見ると、山本の顔が土気色に変わっていた。額には脂汗が滲んでいる。

明石

山本、痛むのか？

山本

…す、すまない。せっかく君たちが誘ってくれたのに…。

明石

分かった、もうしゃべるな。早苗！ 早く病院に電話しろ！ 車を回してもらえ！

明石の妻

は、はい。

山本の妻

あなた、あなた!!

ナレーション 山本の末期ガンによる痛みは、入院後も予想以上にひどかった。鎮痛剤ももはや効果がなく、早い時期に麻薬を使用することになり、そのせいで山本は日中もうつ

らうつらしていることが多くなった。それでも彼は、起きている時は決まって聖書を読んでいた。

病室

看護婦 山本さん、回診です。
明石 よ、何だ、また聖書か。たまにはマンガでも読めよ。
山本 (笑いながら)こっちは時間が惜しいからね。もうこれだけだよ。
明石 ふーん。そんなに面白いか？
山本 面白い。実に面白いよ。君にもぜひ読んでほしいけど…。そうだ、僕が死んだら、この聖書、君にやるよ。
明石 おい、いいよ。どうせもうらんなら、どーんと金目のものにしてくれよ。
山本 おあいにく様。君と違って財テクする才覚はなかったからね。
明石 まあ、あなた、お口が悪い…。
看護婦 何か山本さんと明石先生ってほんとに仲いいか悪いんだか、分かりませんよねえ。
明石 ほら、バカなことばかり言ってるから、おれたちの仲まで疑われちゃったぞ。
笑い

ナレーション 笑いながら、不覚にも目頭が熱くなってわたしは慌てた。いや、心の中では本当に泣いていたのだ。山本…、死なないでくれ。神様、山本の信じているキリスト教の神様。どうしてあんたは、あんなまじめな信者の彼に、ガンなどという試練を負わせたんだ？頼む、どうか、あんたが本当にいるんなら、山本に奇跡を起こしてくれ！

手術室前

ナレーション 手術の日、朝から珍しく小雨が降った。
明石 おはよう。
山本 おはよう。
明石 気分は？
山本 外は雨のようだが、僕の心は雲一つない青空だよ。
明石 そりゃよかった。
山本 君やスタッフのために祈っているよ。
明石 山本、君のキリスト教の神様が君を治してくれるよう、おれも心から願うよ。
山本 明石。たとえ手術が手遅れでも、がっかりしないでくれ。僕は、ガンになったからっ

て、決して君が思っているように不幸ではない。僕はキリストのため、人のために精一杯生きた。たとえこのまま死んでも、僕は天国で永遠に生きられる。だから、十分に幸せなんだ。そのことだけは、覚えておいてくれよな。

明石 山本...。
看護婦 先生、時間です。
山本 麻酔が覚めたら、また会おう。

手術室

明石 オペを始める。メス。
助手 はい。
明石 コツヘル。
助手 はい。

ナレーション 皮膚を切開し、筋層を広げると、内臓が現れた。

丹野医師 先生、これは...。
明石 うむ...。

ナレーション ガンの病巣は、内臓のほとんどに広がっていた。もう、打つ手はない。

明石 ...閉じよう。

ナレーション 何もできずに、手術は短時間で終わった。目を上げると、窓の向こうに、そば降る雨に打たれて、一輪のユリの花がうなだれていた。

ナレーション あれから1年、また、夏が来た。山本は冬の訪れを待たずに逝った。約束通り、彼の書き込みだらけの聖書を渡し、「これを僕だと思って読んでくれ」と言い残して。わたしはその聖書をもって、妻と故郷の仙台を訪れた。

広瀬川岸

明石の妻 あなた、もうすぐ花火始まるわよ。
明石 おい、ちょっとあそこの土手に上がってみよう。
妻 え、イヤですよ、あんな足場の悪い所。
明石 いいから、ここより花火がよく見えるんだ。行こう。

妻 まあ、きれいねえ。
明石 だろ？

ナレーション 遠い日、わたしと山本はこの土手に上って、医者になる約束をし、人はどうしたら
幸せになれるかと真剣に話し合ったのだ。いつも聖書を抱えていた大学時代の山
本。働き盛りで家族を残して死ななければならなかった山本。名声や富を求めも
せず、最後まで淡々と地方の診療を続けた山本…。

山本 (回想)自分が病気だったら医者に行けばいい。でも、人の心には、人を幸せから
遠ざける罪がある。神を捨て、自分中心に生きようとする罪がね。そんな人の心を
いやしてくれるのが、キリストなんだ。

ナレーション キリストの前では、山本のような人間でもいやされるべき罪人だったのだろうか。
それなら、わたしも間違いなくそうだ。だが神は、わたしの願った奇跡を起こしては
くれなかった。唯一確かなのは、彼が安らかに死んでいったということだ。あるい
はこれが、神の奇跡だったのだろうか？

明石 (モノローグ)神様。山本の信じていた神様。あなたが本当の幸せを与えてくれる
方なのか？ わたしでも、信じれば彼と同じ平安を持てるのか？ もしそうなら…。

ナレーション その時、医者わたしは消えていた。あるのは、大なるものの前に心のいやし
を求めてひざまずいている、“病人”のわたしだった。

明石 (モノローグ)山本。僕も君のような医者になりたいよ。人は、心いやされてこそ、人
をいやせる。そのときに、君との約束を果たせたことになるような気がするんだ。

ナレーション 次々に大輪の花を開く夜空を見上げながら、わたしはじっと聖書を握り締めてい
た。

花火。

< 完 >